



学芸員が厚真町の歴史を解説します！

厚真日誌

まちの学芸員 乾 哲也

小学校6年生の社会科の授業で考古学に目覚め、札幌学院大学卒業後、奥尻町、白老町、礼文町、千歳市で発掘調査を行う。平成14年から厚真町に根差した学芸員。



第5回

アツマに移り住んだ最初の和人 近代明治の和人開拓 第一歩の青木与八

今の浜厚真から

北の大地の自然とともに生きてきた先住民アイヌの人々にとつての「アツマ」は、厚真川の河口の地域を指します。アツマが現在の豊かな穀倉地帯に至ったのは、明治時代以降に本州から渡って来て開拓の跡をおろした人々のおかげです。その最初の人物が新潟県三島郡生まれの青木与八でした。函館を経て明治3年(1870年)に厚真川河口部に移住しました。

アイヌ民族の助けがあった

青木与八が移住する12年前ここに訪れていた幕末の探検家で北海道の名付け親、松浦武四郎の記録によると、厚真川河口部に2軒6人のアイヌ民族が暮らしていて、青木与八はこのうちの1軒に同居したそうです。アイヌの方々と寝食を共にして、北海道の厳しい自然環境を乗り越えるための知恵を授かったのでしょう。青木与八はアツマに

定住できた最初の開拓和人となりました。

青木旅館と渡し舟

不慣れた生活も3年が経った明治6年、青木与八は旅人が野宿をする姿を見て、「青木旅館」という駅通(宿場)と、厚真川での渡し舟を営み始めました。

明治12年の記録では「厚真川は舟渡し一人金一錢五厘。河の左右に二戸あり。粗屋なり。一泊金二十五錢、一飯十錢」とあります。

青木旅館は、初代海軍大臣を務めた西郷従道(西郷隆盛の弟)が宿泊するなど、日高



浜厚真の青木旅館(明治44年)

方面への交通にも貢献しました。また、明治35年には青木旅館に皇族の閑院宮が訪れ、食事をされていきました。

浜厚真の発展

明治12年に青木与八が中心となり、町内最古の神社である浜厚真神社が建立されます。その後、明治23年に道路ができ、厚真川に橋が架かり、明治25年には郵便局が開設され、浜厚真は発展を遂げていきます。

明治27年には浜厚真の酒蔵で「厚真川」というお酒が造られました。

水難救助の丸木舟

厚真川に橋が架かり、渡し舟もその役目を終えたかのように思えた明治31年9月7日、厚真村で23人の死傷者をだした大洪水がありました。青木与八は、自身の住宅が流される被害に遭いながらも、渡し舟に使用していた丸木舟で多くの水難者を救出したそうです。

この丸木舟は、洪水と闘ってきた先人の苦勞の歴史と、厚真町に初めて開拓の跡をおろした青木与八の功績を永く伝える歴史的資料として昭和48年に町の文化財に指定され、現在は旧軽舞小学校に収蔵展示されています。



青木与八、水難救助の丸木舟(道内唯一の割竹形)



浜厚真神社と昭和3年(1928年)に浜厚真青年団が建立した青木与八の功績記念碑(町指定文化財)

発行 / 北海道厚真町

企画・編集 / まちづくり推進課企画調整グループ

ホームページ / <http://www.town.atsuma.lg.jp/>

〒059-1692 北海道勇払郡厚真町京町120番地

電話 / (0145) 27-2321 (代)

メールアドレス / atsuma@town.atsuma.lg.jp



2018年は北海道150年
Hokkaido's 150th Anniversary